

活動に備え練習開始

合唱詩劇みいけの闘い 新たな使命帯びて



「みいけの闘い」の第一部の一場面

二十八日の筑後市公演は、おもに「みいけ」の集まり、の集まり、全国から集まってくる仲間に対するアピールであるが、同合唱詩劇の活動は右の公演のあと(きき)つき日南(二月二十九日)一宮崎(三月一日)一延岡(同二日)一長崎(同四日)一佐世保(同十五日)一佐賀(同二十四日)などの公演が決定しており、このほか大分公演が実現するかも知れない。

同合唱詩劇公演活動は、ますますその重要性を増してきている。これからの「みいけ」が予期されている闘争の前途は、これまで以上に宣伝活動を進めることを求めており、そのとき「みいけ」の中で生まれ、その中で育ちながら育って来た合唱詩劇の果たす役割は、決して小さなものではない。

「母ちゃんどこにゆくかね」
あんたがこれって
馬鹿なことをして
会社を首切るといふ
それで三井鉱山に
抗議にゆくかね
「この前もいって、またゆくかね。あんたは何かへんも、な」

社会構造について

三川支部 木村守

随想

社会の発展に貢献 労働者には、一寸につき二円の年給があるのに、すくなくとも、長く生きつづけなければならぬ。力づくに労働して得た賃金を、肉体的に低給に甘んじなければならない。以上のこと、若いエネルギー者には等しいといえよう。シブな肉体からは無軌道に近き労働を吸いあげ、着実な労働力にして、若いたくましい労働者になるべき中高年労働者をしりぞける資本家のたくらみを示している。常用労働者には手賃上げ闘争が

低給の生活は、次代の成長を育む家庭の不健康な結果を生んでいる。その愛の高度成長が逆作用して、社会困窮をよびだしている。一面を救済させる結果となつていくことのないものだ。三池には三井建設という組織が多量の労働者を集め、常用の労働者とともに作業をさせている。ここに大きな矛盾が発生している。常用労働者には手賃上げ闘争が

組め、わすかずつながらも賃上げができ、資本にとっておもしろくない存在となつていくのに対し、組夫労働者には会社が定めた日当や能力給が与えられ、「ごやだ」といふ自由をゆめさせられる。肉体的労働者の悲哀をここに見るようである。産業の合理化は、常用労働者を極度に圧迫し、人員整理をすすめる。そのため若くは失業の大群をあらわにする。失業者を多くすることそのものがコスト削減につながり、安い労働者獲得という手段になるのである。社会教育にたずさわる当事者たちは、非行青少年の増加する現状

を訴えながら、口をすっぱくして家庭教育の大切さを父母に呼びかける。だが、いっこうに効果はあがらない。そこには右に掲げた社会の構造があるからにはかならない。社会の大海に浮く教育のほしは、浮くのがやるといふ現状では、非行少年の撲滅などおぼつかない。教育を、生活を豊かなものにするため、カンとナスクリ

怒り

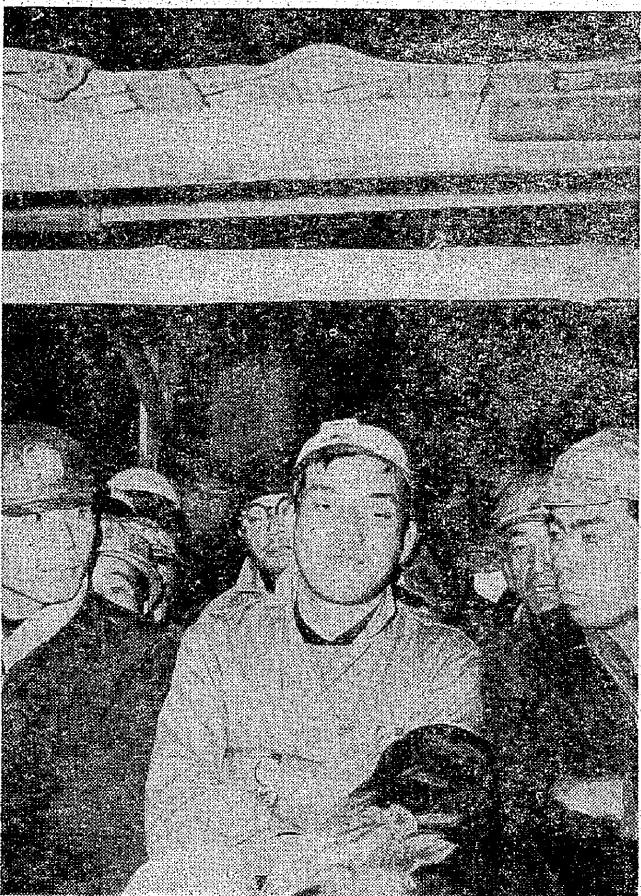
宮浦平田千佐子

「母ちゃんどこにゆくかね」

あんたがこれって
馬鹿なことをして
会社を首切るといふ
それで三井鉱山に
抗議にゆくかね
「この前もいって、またゆくかね。あんたは何かへんも、な」

詩

三川鉱東門における、会社側のビケ。中にはO家族たちの声にうずもれ笑う者もいた。写真の彼とて労働者なのだ。いつかは私たちがともな、たちあがる日がくるだろう……。



「母ちゃん、もう病院に帰らんなんどかね？」

帰って十分もたたないのに、なんと頼りない——夫

「今さき帰ってきたばかりじゃあがね。二日家に泊ってから病院に帰るとさ」

すると五、六分してまた同じことを聞く夫

こんなO患者に三井鉱山は、どうする

「お前の中毒症は治ったけん、職場に帰れ」

もしもお前たちの息子や兄弟に

O患者がいるのなら三井鉱山の幹部たちよ、お前たちはいえるか「お前たちはO患者ではな労働者」

団結餅

宮浦支部

中山和正

ひよひよ
ひよひよの
もち米
窮屈な蒸籠の中に
とじてこめられて
むされる

ウスの中では
こめられて
打たれ 打たれて
たたかれる

ひよひよ
ひよひよは
砕かれても
砕かれても
砕かれても
砕かれても

粘りがある
粘りがある
粘りがある
粘りがある
粘りがある
粘りがある

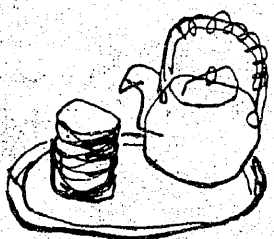
かかやく
かかやく
かかやく
かかやく
かかやく
かかやく

或る物語

三川支部

小柳重義

風が吹いている。泣きながら裏町をぬけて、西目のくまら



坂を下って行く
あのくまら火は
昨夜
吠えつけていた
犬だろか——
風が来るというのに
まんまるい月が
昇っていたっけ、
果物屋は先日から
食欲をそそる
「メロン」を売っていた
深い、深い落葉を払って
忘れ去られた
あの日の石像を……
俺は
みつけようと思っている
しかし
記憶の円(えん)から
外れていた
あの白い涼しい像のことが……
落葉がなんと
降ることだろう、
ふと
果けをよびて
立ちどまり
この淋しい心のすきで
俺は
はげしいくまら女の
焚火をもよほすのだ
会社に対して——
通勤電車は、空の中へ
消えてゆく
烈しい霧の中へ——